

《談話室》

自分をひらく
ことば
世界をひらく
ことば

A君は十七歳。養護学校高等部二年生。大柄で、やや猫背気味。はにかんだような笑顔と穏やかな表情が印象的な自閉症の少年である。水泳部に所属し、全国障害者大会にも出場した。

パニックを起こすと、大声で叫んだり、自傷行為を繰り返すことも多い仲間たちの中で、彼の情緒の安定ぶりは際立っている。

彼のお母さんの話。

小学校に上がるまではしばしばパニックを起こしたことがあります。それが、小学校一年生の終わりごろには、パニックはほとんど影を潜めてしまいました。

小学校に上がる時点で、この子のもっていた語彙はわずかに十数語、それもマンマ、ブーブといった幼児語でした。それが、入学後の一年間で、一挙に十数倍に増えました。国語の授業で、先生と一緒に教科書を読んだのが大きかったと思います。独特のイントネーションで、教科書を暗誦する様子が、今でも目に浮かびます。

それ以来、パニックはほとんどなくなりました。自分の中のさまざまな思いを伝えることができるようになったか、それだと思っています。それまで、胸の中に渦巻く思いを伝えきれなくて、この子がどんなに苦しい思いをしていたか、それに気づいてやれなかったことを、親としてほんとうに申し訳なかったと思いました……。

自閉症の人たちの目に、世界がどのように見えているかをうかがい知ることにはきわめて困難だ。自閉症の中でも知的な遅滞を伴わない人々、いわゆる高機能自閉症、中でもことばの遅滞を伴わないアスペルガー症候群と言われる人々の発するメッセージの中に、わずかにその手がかりがあるにすぎない。

言えることは、私たちが見たり、感じたりしているこの世界が、このようなものとは全く違ったものとして、見えたり、感じられたりする人々が、確かに存在するということである。

ことばが世界を分節するものであるとするなら、ものやことは、分節されて始めて存在する。言語が違えば、当然分節のしかたも異なる。私たちが、全く知らないことばを話す人々の中に置かれたときに感じる根源的な不安、居心地の悪さはそこに由来する。

自閉症の人たちの感じている困難、時にパニックとなつて暴発する不安は、それに近いものかもしれない。

安易な単純化や一般化は慎まねばならない。しかし、控えて目にもいっても、A君の場合、ことばの獲得という事実、彼の精神的な発達の要因として決定的だったのではないか。ことばは、自分を開き、世界を開き、自分とこの世界との関係を切り拓いたのである。

(小池)